

# カンボジア社会科教科書における音楽題材の特徴

—初等科第1学年～第3学年の社会科・理科統合科目教科書に着目して—

山本千恵

(本講座大学院博士課程前期在学)

## Features of Music Subjects in Cambodian Social Studies Textbooks: Science and Social Studies Textbooks from Elementary School First Grade to Elementary School Third Grade

Chie YAMAMOTO

### Abstract

In Cambodia, the Pol Pot regime massacred teachers and other intellectuals and cultural figures, and the educational system was thoroughly destroyed in the 1970s. Although education reconstruction is currently progressing, various problems remain in Cambodia, including low salaries for teachers and the use of children as a labor force.

Music does not currently exist as a distinct subject in Cambodia, and is treated as part of social studies. Social studies in Cambodia aims to develop identity through self-cultural education, as part of the government's approach to supporting individuals to regain their ethnic identity after the Pol Pot administration and subsequent civil war. Although music is treated as part of social studies, music education is minimal at schools in Cambodia. The reasons for this include the cultural destruction under the Pol Pot administration, and an absence of teachers who can teach music.

All of the musical themes dealt with in the current Cambodian elementary social studies curriculum are focused on traditional Cambodian music. In social studies, music is considered a tool for identity development, and is designed to help children understand the framework of the Cambodian state.

To address this situation, the Cambodian Ministry of Education, Youth and Sport started an educational reform process in 2016. This reform determined that art subjects would be set as new subjects, requiring the development of teaching materials and human resources. The nonprofit organization that supports music education for Cambodia for many years applied for the JICA Partnership Program, and was adopted as a "primary school art education support project". The goal of the project was to foster the basic environment necessary to systematically disseminate art education.

The current study focused on the possibility of self-cultural education through music in Cambodia, which has a rich musical cultural history. In addition, the features of music subjects in the current science and social studies textbooks from elementary school first grade to elementary school third grade were examined, and their usefulness as textbook teaching materials was evaluated.

### I. はじめに

1970年代後半のカンボジアでは、ポル・ポト政権によって教師をはじめとする知識人・文化人が大量虐殺された。実に小学校教員の7/8, 中・高等学校教員の1/10, 全体で3/4の教員が殺害されたと言われており, 人材のみならず教材全てが焼き払われるなど(山口2012, p.299), 国内の教育制度は徹底的に破

壊され、深刻な学校不足にも陥った。今日、教育復興が進んでいるものの、教員の給与の低さ、労働力としての子どもの存在といった問題を抱えている。

カンボジアの学校教育制度は、初等学校（6～12歳）、前期中等学校（12～15歳）、後期中等学校（15～18歳）、3つの教育段階からなる。現在、カンボジアの初等学校では週6日、年間38週、2学期制によって学習指導が行われている。年に2回の進級テストがあり、不合格もしくは出席日数の不足で原級留置となる。午前と午後で生徒を交代し授業を行う1日2部制が採用されており、日本と比べて授業時間数も少ない。現在、カンボジアの初等学校における必修科目は、クメール語、算数、理科、社会、体育の5つである。カンボジア国家のカリキュラムに準拠して授業が行われる。教科書は国定教科書で、カンボジア政府が発行する。

カンボジアに教科としての音楽は存在しないが、社会科の一部として扱われている。カンボジアの社会科では、自文化教育を通してカンボジア人としてのアイデンティティを育成することを目的としており、特に古典舞踊がその中心的な役割を担っている。音楽も古典舞踊と同様に社会科の芸術教育分野にて扱われているが、カンボジアの音楽教育の実態は、社会科の教科書に民族楽器の写真が掲載されている程度で、学校現場ではほとんど音楽教育が行われていない。

情操教育の重要性から、カンボジアでの芸術科目の教育普及を目指す日本のNPO団体が、カンボジアの学校へ様々な支援活動を行っているが、全ての学校に支援が行き渡るわけではない。最近では、カンボジアの現職教師対象に音楽トレーニングワークショップや研究授業の実施等も行われているが、子どもの頃に音楽教育を受けたことのない教師が音楽を教えることは決して簡単ではないだろう。

## II. カンボジアの初等社会科

現在のカンボジアでは、初等学校の第1学年から第3学年までは理科と社会科が統合科目として1つにまとめられ、第4学年からは、理科と社会科がそれぞれ独立し学習指導が行われる。2006年に改訂された現行のカリキュラムでは、初等社会科は以下の5つの学習分野から構成されている。

- ① 道徳と公民 (Moral & Civics)
- ② 歴史 (History)
- ③ 地理 (Geography)
- ④ 芸術教育 (Art Education)
- ⑤ 計画と企画 (Planning & Organizing)

### 1) 初等社会科における自文化教育

現在のカンボジアの教育では、愛国心を育み、カンボジア人としてのアイデンティティ育成を図ることが目指されている。それは、ポル・ポト政権とそれに続く内戦による国家の混乱が終息した後、国民が民族的なアイデンティティを取り戻すことが、政府にとって早急に解決すべき課題であったからであろう。その中心的な役割を担っているのが社会科教育である。カンボジアの社会科教育では、自国の伝統・文化を重視しており、自文化教育を通してカンボジア人としての民族的なアイデンティティを育成することをねらいとしている。とりわけ、カンボジアの古典舞踊は、重要な学習内容として社会科に位置づけられている。カンボジアの学校教育への古典舞踊の導入は、国家再建の途上にあるカンボジアにおいては課題解決の一つの方法である（安藤・大矢 2013, p.78）。この自文化教育において、カンボジアの古典舞踊は特に重要な学習内容であり、学校教育で段階的・系統的に位置づけられている。カンボジア人としてのアイデンティティ育成のために、古典舞踊を上手に踊ることができるようになるよりも、古典舞踊の学習を通して子どもたちが自国の伝統・文化に触れ、学び、理解を深めていくことがねらいとされているのである。

## 2) 現行初等社会科カリキュラムにおける音楽

2006年に改訂された現行の社会科カリキュラムでは、「文化や芸術を軸とした国民意識形成に関する記述」が多く見受けられるようになった(貝塚 2014, p.2)。2000年代に入ると、グローバル化の影響、著しい経済成長によって、カンボジアの社会は大きく変わり、「文化や芸術を軸とした国民意識形成に関する記述」は、そういった社会の変容の中で、内戦下で瀕死の状態に陥った伝統文化の復興を軸に、ナショナリズムを喚起しようとするカンボジア政府の試みの1つであったと考えられる(貝塚 2014, p.20)。

しかしながら、長年カンボジアへの音楽教育支援を行っている「JHP・学校をつくる会」によると、古典舞踊と同様に初等社会科の芸術教育分野にて扱われているのにも関わらず、教科書に民族楽器の写真が掲載されている程度で、ほとんど行われていないのが実態である。よって、社会科カリキュラムに示されている音楽教育のねらいと学習内容を明らかにするために、JHP・学校をつくる会提供資料『Social Study G1-9 syllabus 2006』<sup>1</sup>をもとに、初等科第1学年～第6学年の芸術教育(音楽)に関する内容を以下のようにまとめた。

表1 社会科を構成する5つの学習分野

学習分野	
道徳と公民 (Moral & Civics)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちの自尊心を高める</li> <li>・他者の価値を学び、モラルへの理解を深める</li> <li>・法律、カンボジア国家のシステム、政府のルールを学ぶ</li> </ul>
歴史 (History)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界史とカンボジアの歴史を同じように学び、多角的に歴史への理解を深める</li> </ul>
地理 (Geography)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然と人々の特徴を地域ごとに理解する</li> <li>・私たち人間が環境をどのように使い、変化させてきたのか知る</li> </ul>
芸術教育 (Art Education)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古典舞踊、音楽、美術の活動を通して、自己表現する機会を得る</li> <li>・理論性、創造性、表現する力を高める</li> <li>・子どもたちが物作りを楽しみ、芸術活動を自ら進んで行うようになる</li> </ul>
計画と企画 (Planning & Organizing)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会科での学びを通して、自ら進んで物事を計画・企画することの重要性を知り、そのスキルを高める</li> </ul>

表2 社会科・理科統合科目と社会科における芸術教育の目標

科目 (Grade: 学年)	芸術教育の目標
社会科・理科統合科目 (1～3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちが、古典舞踊の学習を通してカンボジア固有の文化に対する愛情をもつ。</li> <li>・子どもたちは、美術教育における「描く」「工作するの」活動を通して、創造性を発達させる。そうして培われた創造性は、子どもたちが楽しみながら音楽に関わることに役立つ。結果的に、子どもたちがカンボジア政府の国家システムを理解し、政府に感謝するようになる。</li> </ul>
社会科 (4～6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古典舞踊、音楽、美術の学習を通して、子どもたちの創造性を発達させる。</li> </ul>

表3 音楽分野における各学年のねらいと学習内容

Grade (学年)	Outcomes (学習のねらい)	Content (学習の内容)
1	・カンボジア国歌の1番と、2曲の伝統的な歌が歌えるようになる	・国歌の1番の学習 ・2曲のクメール伝統の歌の学習
2	・カンボジア国歌の2番と、2曲の大衆歌曲が歌えるようになる	・国歌の2番の学習 ・2曲の大衆歌曲の学習
3	・カンボジア国歌の3番を含む、2曲の伝統的な歌と2曲の大衆歌曲が歌えるようになる	・国歌の3番、大衆歌曲とクメール伝統の歌の学習、歌唱
4	・結婚式で演奏される伝統的な楽器が分かる ・それらの楽器を演奏してみる	・伝統的な結婚式の歌の歌唱 ・結婚式で演奏される伝統楽器について(演奏の体験)
5	・伝統的な器楽合奏の楽器が分かる(楽器の名称が分かる、音色が分かる、見た目が分かる) ・それらの楽器を演奏してみる	・伝統的な器楽合奏(例:モハオリ、ブンピアット等)について(歌唱、アンサンブルの演奏に参加) ・古典舞踊と歌
6	・様々な楽器の音域が分かる(音色で分かる、見た目で分かる) ・それらの楽器を演奏してみる	・イェーケーとバサックについて(歌唱、鑑賞、演奏に参加) ・古典舞踊と歌

現行のカンボジア初等社会科カリキュラムから、社会科において扱われている音楽題材は全てカンボジアの音楽であることが明らかになった。自文化教育を重視しているカンボジアの社会科の特徴を踏まえると、自然な結果である。社会科において音楽はあくまでも国民意識形成のための1つのツールであり、伝統音楽や古典舞踊など様々なテーマからカンボジア国家という枠組みを理解させることをねらいとしている。

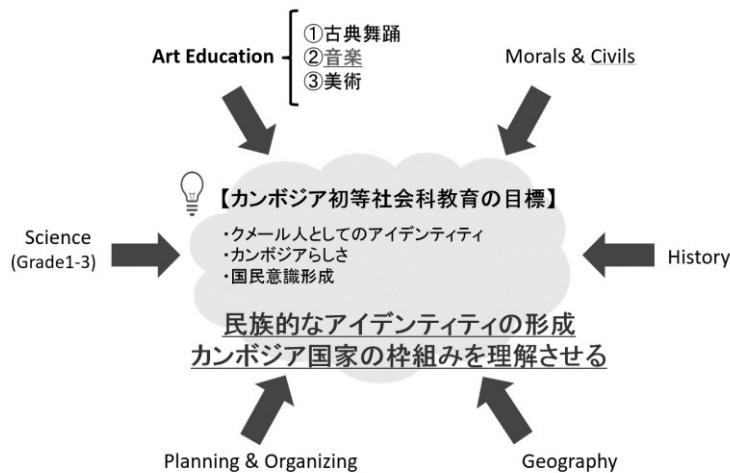


図1 カンボジア初等社会科の特徴

しかしながら、初等社会科における芸術教育が「子どもたちの創造力・表現力の育成、子どもたちが主体的に芸術活動を行うこと」をねらいとしているにも関わらず、各学年の音楽の学習のねらいが「楽器の名前が分かる、歌う、演奏する」といった活動レベルにとどまっているのも、特筆すべき点である。つまり、芸術教育のねらいと各学年の学習のねらいにギャップが生じているのである。

### Ⅲ. 本研究の目的と方法

現行の初等社会科カリキュラム検討を踏まえ、カリキュラムが教科書にどのように対応しているか、どのような音楽題材を用いているか明らかにすることを目的とし、初等科第1～3学年の社会科・理科統合科目教科書の音楽学習内容の翻訳・分析を行う。なお、学年ごとの学習内容の相違点、縦断的な学習のつながりの特性についても明らかにしたい。

翻訳にあたっては、東京大学大学院社会基盤学専攻修士課程1年 Meng Phalkong (メイン・パルコン) 氏の指導、協力のもと行った。今回使用した社会科教科書は、広島大学教育ヴィジョン研究センター (EVRI) 提供の2008年発行版である。

### Ⅳ. 結果と考察

#### 1) カンボジア初等科第1～第3学年社会科・理科統合科目教科書における音楽題材の内容

##### ●第1学年

第1学年の社会科・理科統合科目教科書は、全92ページである。音楽に関する内容は、第4章「私の村の昼と夜」から第3課の86～89ページにて扱われている。題材名は「音楽と娯楽」。

表4 初等科第1学年の音楽に関する学習

単元の名前	学習内容	page
第4章 第3課「音楽と娯楽」	カンボジア国歌『ノーコーリアッチ』1番	86
	カンボジアの音楽様式	87
	『良い子ども』※『Kang Ha Trov Kiol』のメロディを基にして(歌唱)	88
	『野菜畑』※『Kang Ha Trov Kiol』のメロディを基にして(歌唱)	89

##### ●第2学年

第2学年の社会科・理科統合科目教科書は、全108ページである。音楽に関する内容は、第3章「私のコミュニティ」から第5課の92～94ページにて扱われている。題材名は「私は歌を練習する」。

表5 初等科第2学年の音楽に関する学習

単元の名前	学習内容	page
第3章 第5課「私は歌を練習する」	カンボジア国歌『ノーコーリアッチ』2番	92
	『私たちは学校へ行く』(歌唱)	93
	『クロサンテ』(歌唱)	94

##### ●第3学年

第3学年の社会科・理科統合科目教科書は、全108ページである。音楽に関する内容は、第4章「村の人々の生活」から第4課72～75ページ、第5章「周りのもの」第3課96～99ページにて扱われている。題材名は、「私は歌を練習する」、「音(声)と音楽」。

表6 初等科第3学年の音楽に関する学習

単元の名前	学習内容	page
第4章 第4課「私は歌を練習する」	カンボジア国歌『ノーコーリアッチ』フル	72
	人気曲『歓迎の歌』(歌唱)	73
	『夜明け』	74
	伝統的な歌『ボット・スレイ・ホック・スロウ』(モハオリ)	75
	伝統的な歌『ボット・ムロップ・ドン』(結婚式の歌)	75

第5章 第3課「音（声）と音楽」	村での様々な音（声）	96
	音の性質	97
	単純な音から音楽へ	98
	第3課「音と音楽」に関するまとめ・復習	99

## 2) 各学年の音楽題材の内容

カンボジア初等科社会科教科書における各学年音楽題材の内容は以下の通りである。

表7 社会科における音楽に関する学習（初等科第1～3年）

学年	題材名	学習内容（音楽）			
		国歌	教育的な作品	伝統的なクメール音楽	その他
1	音楽と娯楽	1番	『良い子ども』 『野菜畑』	クメールの伝統楽器の紹介 (イラスト掲載)	
2	私は歌を練習する	2番	『私たちは学校へ行く』 『クロサンテ』		
3	私は歌を練習する	3番	『歓迎の歌』 『夜明け』	『ボット・スレイ・ホック・スロウ』 ...モハオリ 『ボット・ムロップ・ドン』 ...結婚式の歌	
	音（声）と音楽				身の回りの 音（声）と音楽

各学年に共通してみられるのは教育的な作品の数々である。集団で“歌う”という手段を通して、挨拶や礼儀などを学ぶことは、ツールとして音楽が利用されている側面があるといえよう。また、第1～3学年では、伝統楽器のイラスト、伝統音楽作品や音楽様式、歌唱曲の歌詞の掲載を通して、カンボジアにはどのような音楽が存在するのか、その概要を簡単に紹介している。例えば、第3学年の第4章第4課「私は歌を練習する」で扱われている伝統的な歌『ボット・ムロップ・ドン（結婚式の歌）』は、歌詞の掲載のみで、教科書内ではその作品が包括するクメール音楽（カンボジア音楽）らしさや、文化的・芸術的価値などには一切触れていない。また、第1学年の第4章第3課「音楽と娯楽」で扱われているカンボジアの音楽様式に関しても、教科書内のコンテンツは楽器のイラスト掲載のみである。音楽教育が普及していないカンボジアの学校の多くは楽器を所有しておらず、それに加えて、カンボジアの社会科・理科統合科目教科書には付属のCDがないため、結果的に音楽体験を伴わない学習となる。よって、第1～3学年を通してカンボジアの伝統音楽は段階的・系統的な学習ではなく、知識の積み重なりにならざるを得ないと考えられる。

それと対照的なのが、第3学年教科書の第5章第3課「音（声）と音楽」である。子どもたちの身の回りに溢れている音や声といった「環境音・生活音」が取り扱われており、音や声がもつ性質・質感にまで触れていることが大きな特徴である。この課は3つのセクションに分けられ、それぞれに1つずつ問いが設けられている。問いは以下の3つである。

- ①「村（身の回り）にはどのような音があるのか？／どんな音を聞いたことがあるのか？」
- ②「それらの各音にはどのような性質があるのか？」
- ③「単純な1つの音からどのような音楽が作れるのか？」

この「音（声）と音楽」は、第1～3学年教科書内における音楽題材の中で、問いが設定されている唯一の課である。身の回りの音の性質に目を向け、それらが様々な性質の違いを有していることを知り、その違いに気付くことのできる“耳”を育て生活に還元する、というサイクルを子どもたちにもたせようとする教科書の意図が見受けられる。

### 3) まとめ

カンボジア初等科第1～3学年社会科・理科統合科目教科書の翻訳・分析から、教科書内に西洋音楽に関する題材はなく、カンボジアの音楽のみが学習内容として設定されていることが明らかになった。カンボジアの社会科が担う自文化教育という目的からすると、自然な結果である。また、教科書内での特筆すべき音楽題材の特徴として、歌唱の活動が設定されているのにも関わらず、楽譜ではなく楽曲の歌詞のみ掲載されている点があげられる。教科書に付属のCDはなく、ピアノ等音取りの出来る楽器が学校現場にはほとんど無いカンボジアにおいて、そのような状況下で音楽活動の拠り所は教師自身の音楽体験となるだろう。けれども、先述したようにポル・ポト政権下での徹底的な文化破壊の影響から、音楽を教えられる教師も楽器等の教材も圧倒的に不足している。結果的に社会科における音楽の学習は、知識としての学びに過ぎないのである。実際に楽器に触れたり伝統音楽の演奏を耳にしたりする機会もない。

しかしながら、カンボジアの社会科が目指す「自文化教育を通じたカンボジア人としてのアイデンティティ育成」のために、音楽学習の場は、単に知識として伝統音楽を理解するだけでは不十分である。子どもたちが音楽そのものもつ芸術的な価値に触れ、そしてその良さや美しさを味わうことが、伝統音楽に対する愛着と誇りをもつことのできる学習機会ではないだろうか。そういった学習機会を経て、カンボジアが有する文化の継承・発展の担い手として必要な「主体的に音楽と関わる力」を育成することは、音楽を通じた自文化教育の理想的な姿ではないかと考える。しかし、現行の初等社会科ではその実現は現実的に難しい。

## V. おわりに

カンボジア教育省は2016年に教育改革に着手し、芸術科目が新たに教科として設置されることとなった。しかしながら、カンボジア教育省内には芸術科目を専門とする職員が不在のため、カンボジア国内の教材及び人材の開発が急務とされた。そこで、上述したNPO法人「JHP 学校をつくる会」がODAの一環であるJICA草の根技術協力事業（新・パートナー型）へと事業を申請し、「カンボジア王国芸術教育支援事業」として採択され、JICAからの委託事業として事業を実施することが決定した。

今後は、引き続き現行初等社会科第4年生以降の教科書内における音楽題材の分析を行うと同時に、豊かな音楽文化を有するカンボジアにおいて、これまで知識としての学習にとどまっていた音楽が、どういった音楽活動を通して学習を深めていくのか。また、自文化教育という社会科が担うねらいの中で、カンボジアの音楽のみ扱っていたその特徴が、教科として設置されるにあたってどのように引き継がれるのか、その発展の過程を追い、あらゆる可能性からカンボジアの人々にとって有益な音楽教育について考察していきたい

## 注

- 1 JHP・学校を作る会提供資料『Social Study G1-9 syllabus 2006』はカンボジア教育省の2006年度から施行されている現行の社会科カリキュラムの英語版。最終的なオフィシャルなカリキュラムはクメール語版である

## 引用・参考文献

- ・安藤雅之，大矢隆二（2013）「カンボジアの初等教育における自文化教育の意義～古典舞踊の継承に注目して～」『学校教育研究』No.28，pp.72-82
- ・安藤雅之，大矢隆二（2016）「グローバル対応力を育成する『伝統・文化』教育の充実に関する考察～東京都の取り組みとカンボジアの学校教育を視座として～」『常葉大学教育学部紀要』第36号，pp.117-126
- ・貝塚乃梨子（2014）「カンボジアにおける国民意識の形成とその変容：1993年以降の初等社会科教育の分析から」『AGLOS Vol. 5』上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科，pp.1-25
- ・羽谷沙織（2008）「カンボジア古典舞踊にみる「クメール文化」の創出」『アジア経済』第49巻第10号，pp.31-59

## 参考 web サイト

JHP・学校を作る会 <http://www.jhp.or.jp/>  
(2018年12月16日最終アクセス)